

ともに生きる

山県市立高富中学校 3年 梶浦 綾華

わたしが障がい者に対しての偏見をもたなくなっただのは母が仕事を始めてからのことでした。母は小学校の特別支援学級で障がい児の支援をしています。母がこの仕事を始めることになったとき、わたしは素直に賛成することができませんでした。仕事をするこじたいは大賛成だったので母には仕事をしてもいいと言いましたが、「友達に聞かれたらどうしよう」また「あまり知られたくないな」とこの仕事を否定している自分もありました。ですが二度の障がい児とふれ合う機会を通してわたしの気持ちは大きく変化しました。今ではこの仕事をずっと続けてほしいと母の職業を誇りに思っています。

一度目の機会は中学1年生のときに母の職業を体験したことです。教室に入ると、すぐに障がいがあると分かる子や見た目では判断できない子などさまざま、はじめは何をしていいか分からず立っただけでした。しかし母の対応を見て、まず声をかけることからはじめようと思いたくさん話しかけましたが、思い通りの返答はなかなか返ってきませんでした。わたしは会話が成り立たないことに戸惑いました。しかしそれ以上に何かを伝えようと一生懸命話してくれる表情があり、聞いているだけでお互いが笑顔になっていました。その後、カレーライス作りやプール、花火などさまざまなことを行いました。包丁や火などを危ないものとして理解している子が少なく危険な行動が多く見られました。そこでわたしが驚いたのは、先生方が“障がい児だから仕方がない”ではなく危険な時は、目を見てしっかりと話していたことです。時には体を張って伝えていることもありました。この姿から、障がい児としてではなく一人の生徒として向き合っていることに気づかされました。そして、ずっと障がい児として見ていた自分をはずかしく思いました。それからわたしの気持ちは少しずつ変化し、いつのまにか友達のように接していました。また、わたしを楽しませてくれる存在になっていました。このような関係になればなるほど、別れはさみしくつらかったです。

そして二度目の機会は、趣味のフルートを通しての出会いでした。中学2年生の夏のことです。自分が大好きなフルートでだれかを楽しませたいという思いが強くあり、養護学校を訪問しました。どきどきとわくわくではりきって吹きましたが、初めて聴く音に混乱し耳をふさぐ子や外へ逃げようとする子がいました。わたしは演奏をしながら不安と後悔でいっぱいになりました。しかし最後の曲を吹き始めたとき、わたしもみんなも笑顔になりました。音にも慣れ、曲が「ポニョ」だったからか一番前の席の男の子が歌いながら踊ってくれたの

です。他の子ども体でリズムをとってくれ、わたしの不安と後悔はいつきに消え去りました。歌ったり踊ったり、表情で感情を伝えてくれたりと楽しさをちがった形で表現してくれたことがすごく印象に残りました。また、先生方にも「生演奏は子供たちの笑顔が違いますね」と言っていたき、やってよかったと心から思いました。

一人一人が個人として尊重され、のびのびと生きられる共生社会を作っていくために、便利で機能の良いものや特別支援学級のようにその人に合った過ごしやすい環境を作ることはもちろん大切です。しかし今、一番求められているのは“心のバリアフリー”なのではないでしょうか。心のバリアフリーとは、わたしたち一人一人が障がい者の思いを受け入れ、障がい者としてではなく一人の人として“心の目”で見ることです。障がい者だから養護学校に行くというイメージをもったり、勧めたりすることは場合によっては人権侵害になります。これらの行動がいつでも障がい者のためになるとは限りません。また、基本的人権や自己決定権などの権利は世界中の人々に平等に与えられ保障されています。だから他人の生き方を他人が決めつけてはいけません。本人の思いや主張を十分に受け入れることが人権を守ることに繋がると思います。

わたしは、母の仕事の体験や障がい児とのふれ合いを通して心のバリアフリーと向き合うことができました。そして気づきました。「障がいの重い軽いはあるけれどサポートが必要なだけで出来ないわけではない。体に障がいがあっても心は障がい者ではない」と。だからわたしにできることとして母から聞く話や自分自身の体験を友達に話し、身近なところから心のバリアフリーを広めていきたいと思えます。そしてすべての人が自分の胸に手を当て、問いかけてほしいです。「心の目をもっていますか」と。